

第1章 本研究の背景と目的

1-1 人のくらしと環境問題

1-1-1 くらしからみた環境

近年、「環境問題」ということばが乱れ飛んでいる。「地球環境問題」のみにクローズアップされてきたこのことばは、「地域環境問題」、「家庭における環境問題」というように、自らが直接関わるローカルなレベルまで焦点が絞られてくるようになってきた。環境民俗学を提唱する鳥越は、「民俗学が対象とする『自然環境』はつねに“人間の手の加わった自然環境”である」¹⁾と述べている。また、飯島は環境社会学において環境が注目されるのは、「人々の生活に、社会的・文化的環境のあり方に、(自然環境が)影響を与えることによってである」²⁾と述べている。

環境民俗学や環境社会学といった視点に立ってみると、環境問題とは、自然環境とそこに住む人々やくらしとの関係から発生するもので、地域住民が直接的に環境に関わることによってその問題が認識されているといえる。過去に直接自然と関わりを持っていた先人達は、ローカルで主体的な環境との関係の中で、自然に対する知恵をつけてきたといえる。このように、自分に関係のある身近な自然環境、すなわち地域環境への関わりが、地域住民の環境への視点を鋭くし、自分に関係のあるものとして認識されるのではないだろうか。

1-1-2 水路とそこにおける人間活動への注目

世界には水郷と呼ばれる都市が多くある。そしてそこには、必ず「人」がいる。人が住むところには必ず水が必要で、洪水や干ばつといった自然の脅威と背を合わせながらも、人々は水路を掘るという方法で水とつきあってきた。水路は、人の生活と共にあり、水と付き合うための知恵がたくさん詰まっているのである。

日本の集落にもまた、水路が多くみられる。人が住むところに水路があり、産業や生活様式の変化とともにその利用や形態も変化した。昭和30年ごろから、各地で上水道の普及や農業用水路の改修事業などが進み、人と水路はその関係の希薄化と共に変化していった。水路は、人が利用することによってこそ価値を持ち、保全されるため、そこに住む人間の歴史を語っているともいえる。また、渡部が「住民の生活の知恵が、この流水空間にちりばめられており水利用を媒介とした地域の文化の基礎をなしている」³⁾というように、人々は水路を通して自然環境と関わってきたともいえる。

このような点から、水路に関わる人の活動の変遷をみることは、大きくいえば、人と環境との関係の歴史を知ることができると思う。本研究では、独特の発生過程や文化をもつ佐賀平野のクリークとそこにおける人々との関係に注目し、調査研究をおこなうことにした。

1-2 佐賀平野とクリークについて

1-2-1 佐賀平野の概要⁴⁾

佐賀平野とは、筑後川以西、六角川下流部以東の、県下最大の平野である。面積は約 400 万平方キロメートルで、河川の氾濫による沖積作用と有明海の潮汐の堆積作用により形成された平野である。また、筑後川以東の福岡県側を筑後平野、六角川以南は白石平野と称される。広義に白石平野を含めて佐賀平野と称する場合もある。また、筑後平野・佐賀平野・白石平野を総称して筑紫平野という。

佐賀平野には、水源である山地は低く、貯水量を確保するために農業・生活用排水路として掘られた「堀（クリーク）」が縦横に広がっている。

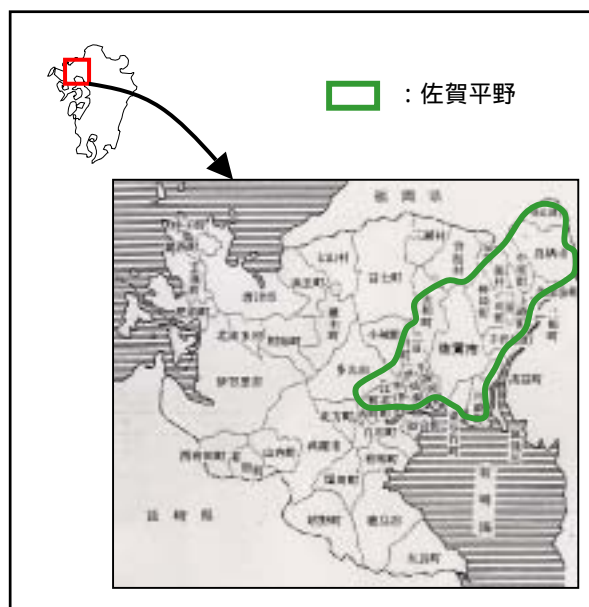


図 1-1 佐賀平野の位置
（「兵庫町史」⁵⁾より）

1-2-2 佐賀平野におけるクリークの種類とその発生過程

クリークのことを、佐賀地方では一般に「堀（「ほり」、なまって「ほい」）」という。「クリーク」ということばは、英語の creek に由来している。その景観が揚子江のデルタ地帯のクリークに似ていることから、昭和 10 年頃からそう呼ばれるようになったという。

堀が分布するのは、佐賀平野のなかの 5 メートル以南の沖積層である。佐賀平野の水源は乏しく、広大な平野に貯水しておく必要があるため、平野にくまなく用水・排水路を掘った。また、有明海の干満差が 6 メートル以上にもなり、この激しい水位変動に備えたものでもあった。佐賀平野の水源は大きく分けて 3 つあり、地域によってその発生や性質が異なる。

以下に、佐賀平野の 3 つの水源と、発生過程と性質の異なるクリークをまとめた。まとめるにあたっては、江口辰五郎による著書⁶⁾を参考とした。

（1）佐賀平野の水源

筑後川

佐賀平野の東側に位置し、東・西側の河川の扇状地を結ぶ。筑後川下流平野の最も低いところを流れる川である。筑後川下流平野の最も低いところを流れる。

域内中小河川（嘉瀬川）

天井川である。平野に水を引くという点では都合が良い。嘉瀬川以東の川はすべて筑後川の支流である。

江湖

潮の満ち引きによって深く掘り崩された澇筋が現在の江湖となった。江湖ははっきりした水源を持たない。流路は極めて短く、流れをさかのぼるといつのまにかクリークになる。江湖は、有明海の干満差によって水位が上下する感潮河川である。

これらの水源を一つのまとまりとして結んでいるのがクリークである。

（２）クリークの種類とその発生過程

自然発生的クリーク

有明海の澇筋から発生した江湖がこれである。有明海沿岸と筑後川沿岸にみられる。この地域の用水は、有明海の干満差による逆流水である。この潮の上に乗った真水を「アオ（淡水）」という。図 1 - 1 は、アオ取水のメカニズムである。

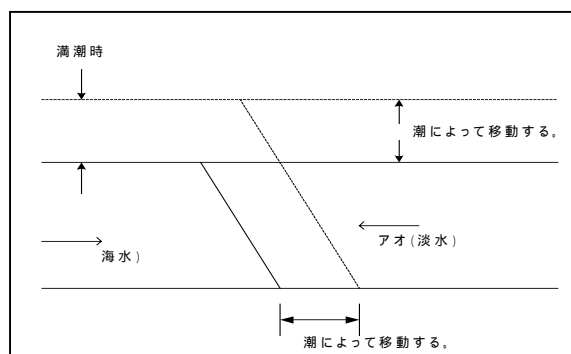


図 1-2 アオ取水のメカニズム
（「佐賀平野の水と土」⁷参考）

条里制時代のクリーク

自然発生的クリークに、大規模で計画的な人間の手が加えられ、クリーク網がつくられていった。その上に大化の改新の事業として村落配置としての条里制が実施された。ひとつの区画である里と里の境界に里道とクリークを設けた。このことによって、江湖と河川とがクリークによって結びつけられていった。それと同時に村とクリークとの密接な結びつきが始まった。

中世荘園制下の不規則なクリーク

荘園制の中での開拓で、土豪は勢力範囲の土地の真ん中に家を作り、周囲に堀をめぐるした。戦乱の時代に入ると、村全体を堀で囲んで外からの侵入に備えた。これが環濠集落である。また、戦国時代になると治安が乱れたため、各村落では民家が 1 軒 1 軒堀をめぐるし、さらに村全体を幾重にも堀で囲んだ。

近世佐賀藩（鍋島藩）によって作られたクリーク

佐賀藩の城と城下町形成の際、水利土木の仕事は軍法の一部として行われた。この際、佐賀藩全体をひとつのまとまった計画によって水利事業を遂行したため、荒廃したり、各地で使い方が独立したりしていたクリークを、ひとつの体系として整えていった。この水体系は、明治以降もほとんど変わらなかった。

1 - 2 - 3 現在の佐賀平野におけるクリークの問題

現在のクリークが抱える主な問題として次のようなことが挙げられる。

- 護岸の浚渫問題：人が管理しなくなったことから発生した。誰が管理していくかという問題がある。
- 生物資源保全の問題：クリークには多様な生物相が生息しており、危惧種も多い。水質汚染や外来種による生態系の変化などの問題がある。

1 - 2 - 4 佐賀平野のクリークに関する既存研究

クリークに関する既存研究として、まず、佐賀平野の水利事業の基礎をつくった成富兵庫重安の研究⁸⁾が挙げられる。この研究は、佐賀の風土を生かし、用水・排水を備えた水利システムを形づくり、昭和中期までの佐賀における土木水利の土台を築いたものとして、佐賀平野の土木水利学においても、歴史上の偉人としても重要な位置を占めている。

また、クリークの生物に関する研究として、昭和中期からの内田萬二による研究⁹⁾が挙げられる。内田は、クリークに生息する生物について、人間のクリークへの関わりとともに論じ、漁具や漁法から、クリークの管理活動にいたるまで、人間の営みの中で関わるクリークの生物について研究している。また、生物学については、近年の佐賀平野の生物多様性への注目から、淡水魚、昆虫、植物の生息場所や生態などに注目した研究¹⁰⁾がある。その他、クリークの水質に関する研究¹¹⁾では、近代におけるクリークの汚濁を問題としている。また、近年では、クリークに対する住民意識にも注目されており、歴史的変遷での意識の違い、清掃活動における住民の意識に関する研究¹²⁾もされている。

佐賀平野とクリークの形態や人々の慣習が類似している、福岡県筑紫平野のクリーク地帯においては、増野途斗による農業水利や水利組合の成立に関する研究¹³⁾があり、近年では、加藤仁美による多元的関わりからみた水環境管理保全に関する研究¹⁴⁾もおこなわれている。加藤は、「一元的な集中管理ではなく、多元的な主体の形成が模索されるべきであろう」¹⁵⁾と述べており、多元的な主体によるクリークへの関わりの必要性を提言している。

本研究では、佐賀平野における個別の分野の研究に加え、加藤がいうような多元的な観点からみる必要があると考え、特に人とクリークの関係に注目した。本研究は、その関係を明らかにし、具体的なイベントの可能性を示すという点で新しい視点といえる。

1 - 3 本研究の目的

以上のような佐賀平野のクリークの背景を受けて、本研究では、歴史的変遷における人とクリークとの関係を農民のくらしや民俗といった観点から明らかにし、戦前の、クリークが住民の手で管理されていた時代に、その関係が多元的で重層的に関係していたことを示す。また、現在において、どのような関係が失われ、新たに発生したかを明らかにする。これに加えて、明らかになった戦前から現在までの具体的な関係性から、特に具体的なイベントとしての可能性を示し、今後の人のクリークへの多角的な関わりについて提案することを目的とする。

1 - 4 本研究の意義

古来よりクリークは、人が関わることによって保全をしていた。地域環境としてのクリークを、住民の生活から捉えることで、人と環境、人と人との関わる場としてのクリークの可能性がある。本研究において、戦前の密接な関係をヒントとして今後のクリークの保全と利用のあり方の可能性を示し、現代において人とクリークの関係の再構築を提案することは、多角的な人々が自ら関わって地域環境を創出し、文化を継承していくために、非常に意義深い。

1 - 5 本研究の構成

本研究の構成は図 1 - 3 のようになっている。まず第 1 章で研究の背景と目的、第 2 章で研究の方法について述べる。第 3 章では、文献・ヒアリング調査の結果から分析・考察し、第 4 章では DEMATEL 法を用いて一対比較調査の結果を分析し、考察した。最後に、本研究の結論を述べる。

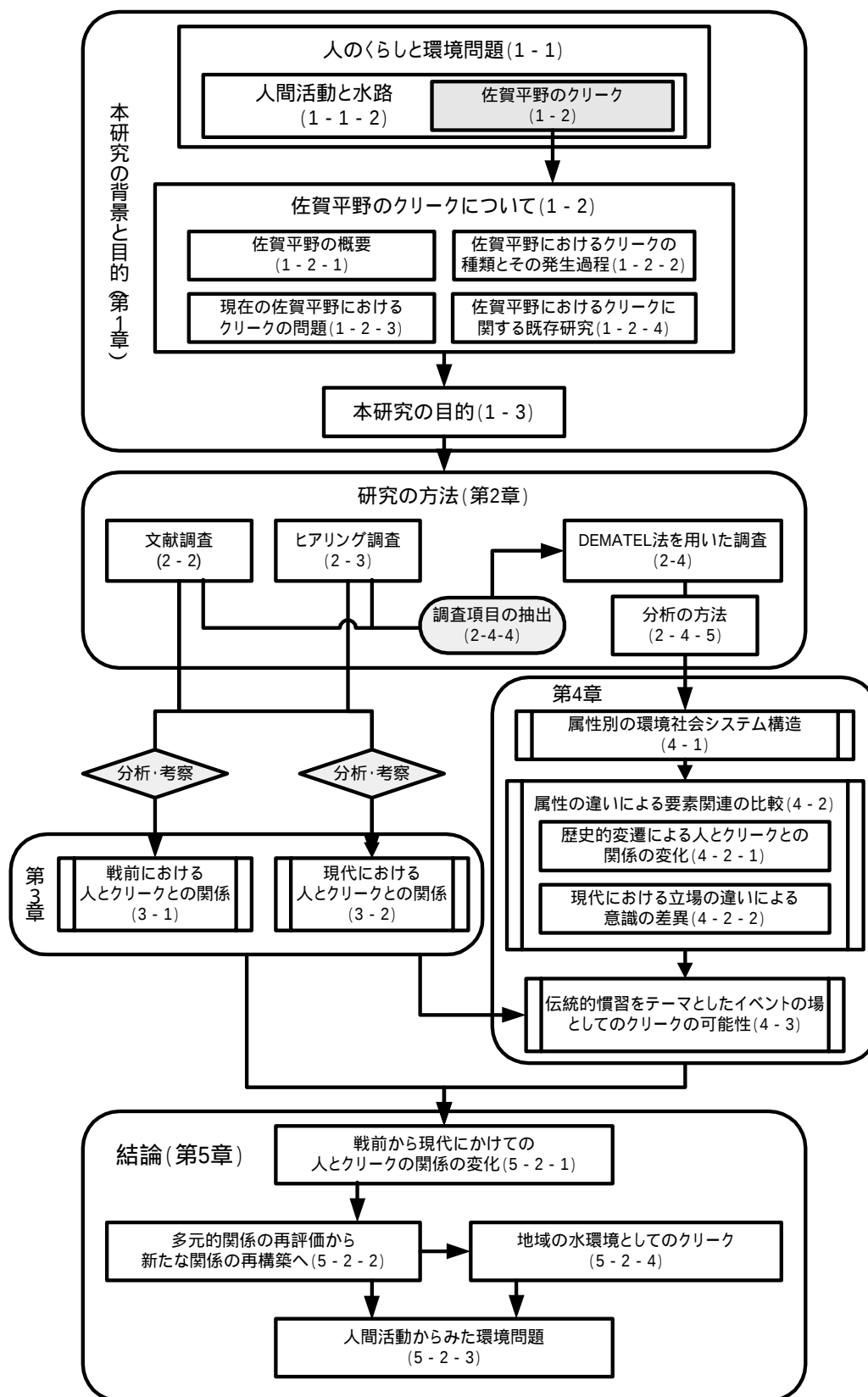


図 1 - 3 研究のフロー

脚注

- 1) 鳥越皓之編：試みとしての環境民俗学，雄山閣出版（1994）
はしがきより引用。
- 2) 飯島伸子編：環境社会学，p.3，有斐閣ブックス（1993）
- 3) 渡部一二：生きている水路，pp.9 - 10，東海大学出版会（1984）
- 4) 以下を参考にして記述した。
佐賀県大百科辞典，p.369，佐賀新聞社（1983）
- 5) 兵庫町史，p.7，兵庫公民館（1975）
- 6) 江口辰五郎：佐賀平野の水と土，pp.96-121，新評社（1977）
- 7) 江口辰五郎：佐賀平野の水と土，p.103，新評社（1977）
- 8) 本研究では以下の文献を参考にしたが、この他にも、成富兵庫重安に関する文献は、
兵庫が行なった土木水利に関するものから兵庫自身に関するものまで、数多くのもの
がある。
江口辰五郎：佐賀平野の水と土，新評社（1977）
- 9) 内田萬二：堀，新郷土（1953 - 1954）
内田萬二：佐賀平野の堀と漁法，佐賀女子短期大学紀要，14，51 - 69（1980）など。
- 10) 上赤博文・久我浩人・坂本兼吾・田島正敏・中原正登らによる研究が挙げられる。
以下にその例を挙げる。
上赤博文・中原正登・田島正敏・久我浩人：佐賀のクリーク環境と生物相の研究，
佐賀自然史研究，1（4），pp.181 - 182（1998）
上赤博文：佐賀市兵庫町下淵の植物相と植物群落の変化—クリーク公園予定地にお
ける継続調査—，佐賀自然史研究，1（4），pp.183 - 194（1998）
中原正登：佐賀市兵庫町に生息するチョウ類、トンボ類と圃場整備の影響，佐賀自
然史研究，1（4），pp.195 - 208（1998）
坂本兼吾・田島正敏：佐賀市兵庫町のクリーク公園整備事業と淡水魚類相，佐賀自
然史研究，1（4），pp.209 - 216（1998）
久我浩人：佐賀市兵庫町下淵の鳥類：佐賀自然史研究，1（4），pp.217 - 220（1998）
- 11) 古賀憲一・荒木宏之・野原昭雄・渡辺訓甫：佐賀クリーク網の水質特性と水質モデ
ルに関する研究，環境システム研究，18，192 - 197（1990）
古賀憲一・野原昭雄・荒木宏之・渡辺訓甫：佐賀クリーク網の水質管理に関する研
究，環境システム研究，19，112 - 117（1991）
- 12) 荒木宏之・古賀憲一・荒牧軍治・二渡 了：佐賀クリーク網の歴史的変遷と住民意識，
環境システム研究，18，32 - 37（1990）
野原昭雄・古賀憲一・荒木宏之：佐賀クリーク網における水質保全活動と住民意識，
環境システム研究，20，372 - 377（1992）

- 1 3) 増野途斗：福岡県花宗用水組合の成立展開とその背景に関する研究，農学集報，27
(1)，10 - 23 (1982)
増野途斗：矢部川流域の地域条件と農業水利の展開に関する研究，農学集報，28(1)，
75 - 92 (1983)
- 1 4) 加藤仁美：水の造形，九州大学出版会 (1994)
- 1 5) 加藤仁美：水の造形，p.153，九州大学出版会 (1994)

-
- 1
 - 2
 - 3)
 - 4
 - 5
 - 6)
 - 7)
 - 8)
 - 9)
 - 10)
 - 11) 古賀憲一他：佐賀クリーク網の水質特性と水質モデルに関する研究，環境システム研究，18，192 - 197 (1990)
古賀憲一他：佐賀クリーク網の水質管理に関する研究，環境システム研究，19，112 - 117 (1991)
 - 12)
 - 13) 増野途斗：福岡県花宗用水組合の成立展開とその背景に関する研究，農学集報，27(1)，10 - 23 (1982)
増野途斗：矢部川流域の地域条件と農業水利の展開に関する研究，農学集報，28 (1)，75 - 92 (1983)
 - 14)
 - 15)